

- 山間部の高齢化過疎地域である山内三又地域の伝統野菜「山内にんじん」は、品種固有の形質を保持した種子が少なく、絶滅の危機にあった。
- 平成19年度から、伝統野菜の復活と営農組合の経営安定、地域活性化を図るため、重点普及計画に位置付けて支援を実施した。
- その結果、伝統野菜「山内にんじん」が復活し、加工品開発やグリーンツーリズム活動の活性化を後押しした。

具体的な成果

1 伝統野菜「山内にんじん」の復活

- 絶滅の危機に瀕した伝統野菜「山内にんじん」の、品種固有の形質が復活。



関係者による形質の検討

2 地域の推進品目に定着

- 営農組合が率先して導入し、定着させた結果、地域の重要な推進品目に成長。

3 女性加工グループの誕生

- 三又地域の女性達を中心に「三又旬菜グループ」が結成され、山内にんじん加工品「いぶりにんじん」の発売を開始。

4 交流の増加とコラボ企画の誕生

- ボランティアグループや大学生など若い人材と地域ぐるみの交流を開始。
- 秋田大学とのコラボ企画により、いぶりだんごんの加工品「いぶりばでい」が誕生。

5 「山内にんじん」フェアの開催

- 生産者品評会や山内にんじんフェアの開催を通じて、生産意欲が喚起され販売促進につながった。(現在も継続開催中)

6 販売数量の増加

- 栽培技術の向上と採種の確保で増加。販売数量(H20:1トン → H24:8トン)

普及指導員の活動

平成19年

- 「山内にんじん種子生産研究会」を設置し、種子生産方針についての合意形成を支援した。

平成20年

- 県農試において系統選抜を開始し、集落と農試をつないで活動を支援した。また新規作付推進により生産者を確保した。

平成21年

- 選抜中の優良系統を展示し、栽培意欲の喚起を図るとともに、栽培技術の高度化を図った。

平成22年

- 優良系統の選抜が終了した。地域においては、自家採取体系の確立を支援した。

普及指導員だからできたこと

- ・ 集落リーダーをはじめ、行政、試験研究との連携で、伝統野菜の産地復活のみならず、加工品開発、グリーンツーリズムなど地域の活性化をコーディネートした。

- ・ 普及員ネットワークによってオリジナルロゴマークを作成し、販売促進に貢献した。

1. 取組の背景

秋田県横手市山内三又地域は、県南の豪雪地帯横手市の南東部の県境に位置し、厳しい自然環境・閉ざされた山里ゆえに残る手つかずの自然に恵まれ、数々の山の幸が味わえる地域である。

三又営農生産組合は、平成18年11月に設立された構成員26戸の組織で、水田28haに、基幹となる水



稲のほか、「いぶりだいこん（いぶりたくあん漬け）」の原料となる秋だいこんなどを作付けしている。山間地の高齢化過疎地域で営農を行っており、昔の農作業の共同形態である「ゆい」復活による地区の活性化にも取り組んでいる。

同地域では、伝統野菜「山内にんじん」が栽培されているが、自家採種を繰り返してきた結果、形質が本来と異なり、品種固有の特性を保持しておらず、その復活に期待がかけられていた。

平鹿地域振興局農林部普及指導課（現 農業振興普及課）では、この絶滅の危機に瀕した伝統野菜の復活を核として、営農組合と農村の振興を図るため、平成19年度から重点普及計画に位置付けて支援を行った。

2. 活動内容（詳細）

[平成19年]

伝統野菜「山内にんじん」は、在来種の栽培がほとんどなく、品種固有の優れた特性が保持出来なかったことから、横手市山内地域局、県平鹿地域振興局、農業試験場の連携による「山内にんじん種子生産研究会」を設置し、山内にんじんの本格栽培に向けた今後の種子生産の取組方針について、合意形成を図った。



女子高生による播種作業ボランティア

手始めに組織に働きかけ、組織リーダーのほ場でのんじんの生産技術確立のための栽培（県外市販種子）試験を行った。しかし、干ばつや雑草被害等ではほとんど収穫には至らなかった。また、在来種を農業試験場で栽培した結果、形

質のバラツキが大きく収量性が不安定だった。このため、次年度に向けては、①基本的な栽培方法の見直し、②形質改善のための優良株の選抜等について農業試験場と話し合いを重ねることとした。

〔平成20年〕

栽培面積の拡大を目指して「山内りんじん」を推進品目とし、新規に導入する生産者を増やしていった。

また、先進地視察の実施や栽培技術の検討、特に播種時期、使用資材、管理方法などを再検討した結果、安定生産技術の確立につながった。

販売については、都内や横浜市での販促活動を積極的に行い、関心を持った企業を現地に招き栽培状況を紹介した。

その結果、取引が多方面に広がったが、首都圏やネット販売業者の小口取引が中心だったため、面積拡大に向けた安定販路の確保が課題となった。

一方、地域では「いぶりだいこん」などの加工を目指した動きが強まり、女性農業者を中心とした「三又旬菜グループ」^{みつまたしゆんさい}の設立を誘導し、加工技術の確立を支援した。

〔平成21年〕

20aまで栽培面積が拡大し、生産性も向上したことから、生鮮での販売のみならず、加工品の開発・販売に取り組んだ。

「三又旬菜グループ」では、新商品として地域特産の「いぶりだいこん」をヒントにした“いぶりにんじん”を開発し、販売に至った。

商品化に当たっては、市役所山内地域局、農業試験場、県販売担当課と連携し、企画コンセプトのブラッシュアップや商品パッケージの検討を支援したほか、市内の試食販売及び都内での販路開拓を行った。また播種、収穫作業への高校生ボランティアの活用や秋田大学研究生の受け入れなどを企画し、集落活性化を側面から支援した。



育種中の状況を視察研修



3. 具体的な成果

(1) 絶滅の危機にあった伝統野菜が集落活動のサポートで復活

平成18年に開始し、平成19年からの普及指導課のサポートで本格化した「山内にんじん」復活のための活動は、平成22年に系統選抜が終了した。「品種固有の魅力ある特性」を備えた本来の「山内にんじん」が復活したことで、これを祝したフェアが開催された。フェアでは青果や加工品を即売した他、普及員の県内ネットワークから作成してもらった“ロゴマーク”を用いて販促活動を行った。



(左：秋田さきがけ新聞のフェアの記事、
上：販促に用いたロゴ)

(2) 「山内にんじん」が地域の重要な推進品目に定着

平成20年には、面積20aで、出荷量1t、販売額20万円であったが、平成24年は、出荷量8tにまで増加した。このことは、平成21年に農業試験場において優良系統が選抜されたことや、その後の種子供給体制を明確化したことで後押しされ、現在は旧山内村全域への面積拡大が続いている。

また新商品の“いぶりにんじん”も加工品として定着しており、今後一層の生産拡大が期待されている。



(3) 交流の増加とコラボ企画の誕生

平成21年8月、秋田大学横手分校開設をきっかけに、学生の地域交流事業“秋田大学オフィシャルいぶりがっこ製造プロジェクト”が始まり、三又営農



生産組合とのコラボ企画で「いぶりばでい」が誕生した。「みんなで作った」の『everybody』と「いぶりがっこ」をかけて命名された「いぶりばでい」は県内百貨店や秋田大学生協で販売されている。

4. 農家等からの評価・コメント

(三又営農生産組合 組合長 石沢氏)

試作導入や実践ほ、先進地視察研修、直売マーケティング支援などを通じて、普及指導員からは様々な働きかけを受け、地域のみんなが三又地域の産物には魅力的な要素がたくさんあることを再認識することができた。

「山内にんじん」の特産化を成功させ、生産拡大するためのポイントは、生産技術の確立も重要だが、加工や直売などで「産品を売る相手確立する戦略」をたてることが一番大切であると気づくことができた。

5. 普及指導員のコメント (元平鹿普及指導課 木村 (野菜担当))

3年間の普及活動を通して、「栽培技術や加工技術はもとより販売の確立が新規作目の導入に最も重要である」と、組織リーダーの意識が変化していったことに、伝統野菜「山内にんじん」の復活と等しいほどの活動の意義を感じた。

また、今回の活動により、これまで経験のないマーケティング活動を展開する貴重な機会にもなった。

6. 現状・今後の展開等

安定販路の確保のため、業務需要向け実需者等とのマッチング支援を行い、伝統野菜生産の継続を目指す。

地域の良き理解者、応援者となる消費者とのつながりを確立するため、顧客管理や販売促進活動の取組を支援する。